註㈠国文学「解釈と鑑賞」春月特集号
註㈡国文学「解釈と鑑賞」六月特集号

むすび

以上『永代蔵』一卷を通して西鶴のリアリズム的限界を考察したのであるが、結論としてその限界とする所は、彼の作品が俳諧的思想をおびた短篇の集積であつた事に帰着した。町人文学の持つ価値が、その写実性の上にあつた。有るがまゝの彼等の生活を描いて人間性の写実を写し出した、その写実の優秀なる上にあつたのである。

浮沈多き社会、一寸の油断から忽ちにして転落するような社会、変動多き社会生活に於いては、明日の事よりもその日、その時の事が大切となつて来るのである。いわば刹那に生きる人間とでもいうのであろう。まさに戦々兢々とした時代の反映だつたのである。

——以上——

参考文献

一、リアリズム研究　古在由重著
「リアリズム論について」　岩上順一著
一、西鶴　近藤忠義著
一、井原西鶴　片岡良一著
一、西鶴研究ノート　暉峻康隆著
一、リアリストとしての西鶴　S・Hヒベット著
一、西鶴のリアリズム　松井定之著
一、近世生活と国文学　麻生磯次著
一、江戸小説研究　尾崎久弥著
一、近世小説史上方篇　相磯貞三著
一、町人文学　藤村作著
一、全釈『日本永代蔵』　久松潜一著
一、西鶴評論と研究下　暉峻康隆著
一、現代文学論争史

晶子・白秋・茂吉歌に於ける助詞の研究

隈部幹子

序論

私は、与謝野晶子、北原白秋、斎藤茂吉については、くわしく、深くは知らない。しかし助詞の調査をすることによつて、彼等の歌風なり、性質なりをいくらかでも明らかにすることができればと思つて、三人の助詞の統計をとつてみるのである。

さてここで、なぜこの三人を比べる事にしたかを、ちよつと述べてみようと思う。

まず晶子と茂吉であるが、

第一番目に、晶子が新古今調の歌人であるのに対し、茂吉が、万葉調の歌人だと言われている事である。

第二番目に、女と男の異りが有るのではあるまいかという考えが起つた事である。

第三番目に、年代から見ると、彼女は、明治三十三年から昭和二十七年ぐらいの間に活躍した人間であり、彼は、明治三十八年から昭和二十八年の間に活躍した人間であつて、同じ時代において歌に専念したという事である。

第四番目に、彼女が、「明星」派の代表的な人間であり、彼は、「アララギ」の代表的歌人である事である。

第五番目に、彼女は、常にロマンの夢を歌い続けた浪漫歌人であるのに対し、彼は、素朴で、写生的な人間であるという事である。

これら以上五つの違いから二人を比べる事にしたのである。

しかしここで、白秋もとりあげる様にしたのは、やはり明治三十三年から昭和十七年の間に活躍した人間であり、茂吉と白秋が、一時的にでも、影響されあつた人間ということから、彼もとりあげる事にしたのである。

次に、歌が五百首に限定されたのは、時間的に、五百首しか出来なかつたためである。

この五百首は、次の通りにとられている。晶子は、岩波文庫の「与謝野晶子歌集」、――与謝野晶子自選――において、

「乱れ髪」（明治三十四年七月）から、「夏より秋へ」（大正三年一月）まで全部とり、「さくら草」（大正四年三月）を始じめから八首とり、合せて五百首とする。

白秋は、新潮文庫の「北原白秋歌集」――北原隆太郎、木俣修編――において、

「桐の花」（大正一年）、「雲母集」（大正四年）を全部とり、それに「雀の卵」（大正十年）において、「白木蓮花」まで全部とり、五百首とする。

茂吉は、最初は、現代日本文学全集の「齋藤茂吉集」において、

「赤光」の（自明治三十八年至明治四十二年）の作を、始じめから二百首全部とり、次に、岩波文庫の「齋藤茂吉歌集」――山口茂吉、紫生田稔、佐藤佐太郎編――において、

「赤光」の（自明治三十八年至明治四十二年）の作中「分病室」一首と、（明治四十三年）作から（大正二年）の作まで全部と、「あらたま」、「つゆじも」の（大正九年）の作まで全部とり、五百首とする。

さてこれら五百首中から助詞をぬきだし、色々な表にまとめてみたが、ここでは、その内の「助詞の語い別統計表」を示し、それによつて、三人三様の特色をみたいと思う。

又、この助詞の分類は「文語口語対照国文法表」（中央図書）をもとにしてする事をつけ加えておきたい。

本論

一

助詞の語い別統計表（例えば、が、の、つ、……など一つ〳〵。）

「格助詞」

	晶子	白秋	茂吉
が	75	97	79
の	867	774	754
つ	2	3	9
を	194	135	175
に	329	277	382
へ	8	4	2
と	166	119	68
より	45	10	27
から	1	9	2
にて	1	0	3
や	0	0	0
合計	1688	1429	1501

「接続助詞」

	晶子	白秋	茂吉
ば	61	90	90
も	8	1	2
もど	20	12	11
が	0	0	1
に	8	9	9
を	0	0	0
て	135	177	211
して	8	0	3
で	6	0	0
がら	4	2	39
つ	6	13	2
合計	256	304	368

「副助詞」

	晶子	白秋	茂吉
は	119	131	180
もぞ	109	91	95
なむ	15	19	10
やか	0	0	0
そこ	22	10	6
にだ	14	29	14
らすさ	14	6	8
へまの	1	0	0
でばり	0	0	0
みし	2	7	7
かど	4	2	1
ばな	4	2	0
	4	1	0
	4	3	10
	10	0	4
合計	322	301	335

「終助詞」

	晶子	白秋	茂吉
な	4	3	1
なな…ばなかな	0	2	0
そやむなな	0	0	0
むなな	0	0	1
なはし	0	3	1
かやよ	64	13	19
よこを	6	5	4
をかも	0	0	1
かもも	3	0	0
かにゑ	20	15	10
	20	24	20
	0	0	0
	2	1	7
	1	4	3
	0	0	1
	0	35	46
	1	0	1
	0	3	0
合計	121	108	115

二

さてこの表をもとに、いよ〳〵何か三人の特徴をつかみ取らねばならぬのであるが、始めに、これら三人の歌風をいろんな参考文献から、拾いつつ示して行きたいと思う。

まず晶子においては、「国文学　解釈と鑑賞」(昭和二十九年四月特集増大号)の「古今調歌人の系譜とその変貌」で、木俣修氏は「晶子が美に奉仕し、芸術至上的な生き方の中に、いのちを削つてなした作品には、華麗な修辞や、屈曲の多いリズムが眼立つのであるが、それらをとおして、ひびいて来るものは哀艶な気分である。ここに鮮やかな新古今調の継承が見られるのである。しかも晶子には、西欧詩から接受した新しい官能と感覚が豊かに見られるのであつて、伝統の餘情幽玄に西欧的な象徴新風を添加していると言い得るのである。新古今の近代的新展開と認めるべきであろう。」とある。

白秋においては「国文学　解釈と鑑賞」において、中村正爾氏が、「……『萬葉を尊信すれども、萬葉に偏執せず、新古今を愛敬すれども、亦之に迷眩せず』と述べて、短歌の信條としているのである。要するに直感と餘情、簡朴と幽玄、古典と新風、この新しい境涯にあつて所謂、短歌においての近代の新幽玄體の完成に力をつくしたのであつた。」とあるが、この中における『……』の白秋の言葉には特に、表を見るにあたつて注意をせねばならぬ事である。同じ文献の中で、中村正爾氏は、「白秋は、若年にして当代唯一の文芸登龍門であつた『文庫』に先ず短歌を投じて喝采を博した。その作風は、ひどく萬葉集に影響されたものであつたが、漸次近代詩に傾き『明星』に転向して『邪宗門』『思い出』の華々しい熱情ぶりを発揮し、また『短歌は緑の古宝玉である』という立てまえで、さかんに『桐の花』時代を招集して、大いに新感覚、新官能をもつて短歌の面を開拓し……」とあり、「国文学」(解釈と教材の研究　八月号)で、河村政敏氏は、「茂吉と白秋とは、会つては互に認め合い、影響され合つた仲であるが……」とある。これも又統計表を見るさいみのがす事の出来ぬ事である。

では最後に、茂吉についてはというと、何といつても、晶子が新古今調なのに対して、万葉調であることであろう。彼の作品の特色は、万葉時代における素朴で、写実的な面を摂取している事である。「国文学　解釈と鑑賞」(昭和二十九年)に加藤将之氏が「処女歌集『赤光』より一躍歌壇に登場、新詩社の歌風と対立して、写生主義を一貫し、萬葉調の近代化に成功、以後の歌集に於て不断に新風新型を打ち出し、歌壇の驚異となり、赤彦以後のアララギを確乎不動のものにした。……」とあり、同じ文の中で、「萬葉調、萬葉用語をひたむきに攝取した最後の人茂吉、『けるかも時代』の最後の人茂吉、これは恐らくその通りとして今後の時間が決定しよう」とある。「短歌」(三月号)――「齋藤茂吉特輯」の中で佐藤春夫は「彼は、自分には古代人のやうな近代人、もしくは甚だ近代的な古代人のやうな気がする」「素朴に伝統の本流に身をまかせてゐ

ただけに、異質というほどの新しいものは、決してそこから生れる筈もなかつた」とあるが、その中の「古代人」とは万葉人をさし、「素朴に伝統の本流に……」とあるのは万葉調を指すのである。

以上の事を参考にして、統計表から、問題になりそうな助詞を拾いあげ、それらをけんとうして行きたいと思う。

1　接続助詞「で」について

「文語文法詳説」で湯沢幸吉郎氏は「『で』は、打消の助動詞『ず』に、接続助詞『て』の付いた『ずて』からできた語であつて、平安時代から用いられた。」とあり、「日本文法、文語篇」（福岡国語研究会編著）には「『で』は、『ず』の連用形に、助詞『て』が付いた『ずて』のつづまつたもので、一語化したのは、平安時代に入つてからと思われる。」と書かれている。それから考えると、表における、晶子「6」、白秋「0」、茂吉「0」で、晶子に「6」あるのは、平安以後に用いられた助詞であれば、新古今的であると言われる彼女が、他の二人に比べて多いのは当然それを裏づける事と成るのである。又、茂吉が少いのは、万葉集の時代において「で」が未だ発生していなかつたとするならば、万葉の歌人には使用率が少いのは当然で、彼が万葉調であることを、意味する事になる。白秋においては、新古今、万葉の影響があるが、ここでは万葉調と言えるのである。

2　副助詞「や」について

「文語文法詳説」の中で、湯沢氏は「……平安時代に入つてから『や』が、多く用いられたようであるが、これは『か』に比較して音調が柔かいので広く好まれたためと思われる。……」とあり、「国文学」（「解釈と教材の研究」七月号臨時増刊）の中の「『や』の研究」で、福島邦道氏は平安時代は、もはや『や』が全盛で、そのことは『古今集総索引』によつても明らかであろう。『や』のもつやわらかな語感が王朝人に好まれたからではないかともいわれている。」とある事と、表とを照らし合わせてみると、晶子が「22」、白秋が「6」、茂吉吉「6」であつて、新古今集が平安の作品であることからして、晶子の「22」というのは、彼女が、新古今調の歌人であるという事を、裏づける事になる。又、柔かい響きをもつ「や」を女性として好んだというのも一つである。又白秋、茂吉に少ないのは、逆から言うと、万葉調の歌人という事になる。

3　副助詞「し」について

「高等国文法新講」に「『し』は、奈良朝時代に最もさかえた助詞である。」と言い、「国文学」（「解釈と教材の研究」七月号臨時増刊）には、「『し』は、奈良時代以

前の語であろうと、現存資料からは考えられる。この語が上代の文献に書き止められた時には、既に助詞としての用法を示していた。（記紀歌謡）、万葉集では更に豊富な用例と、広い用法を見ることができる。（奈良朝文法史）。……」、とあることから、表をみてみると、晶子が「4」白秋が「3」、茂吉が「10」というぐあいで、茂吉の「11」は他の二人に比べて多い。これは、彼が万葉調である事を意味する。晶子が少い事は、新古今調の歌人であるためであろう。又、白秋は、この場合新古今調の歌人と言うことになるであろう。しかし、彼が「し」を好まず、そのために用いなかつたとも考えられる。

4　副助詞「など」について

「文語文法詳説」で、湯沢氏は「平安朝に発生した助詞で、後世に引き続いて用いられた」とあり、「国文学」（「解釈と教材研究」七月号臨時増刊）では「この語は、平安時代に発生し、その後現代語に至るまで盛んに用いられてきている」とある。故に、万葉時代には、まだ使用されず、新古今集には使用されたものと思う。これを、表とみくらべると、晶子が「10」、白秋が「0」、茂吉が「4」となつていて、晶子が三人に比べ多いと言う事は、新古今調歌人といわれるゆえんが少なからずここにもあるわけである。茂吉、白秋に少いという事は、万葉調歌人である事を意味する。

5　終助詞「かな」について

「国文学」（「解釈と教材研究」七月号臨時増刊）に「……、万葉期に華やかな存在であつた『かも』は万葉集から約百年の後の古今集では殆んど『かな』にその位置を譲り……」とあり、「文語文法詳説」では「『かな』は平安朝時代以後に行なわれた終助詞であつて、感動の意を表わし……」とある。そこで表を見ると、晶子が「64」、白秋が「13」、茂吉が「19」となり、晶子が、だんぜん多い。ここにも彼女の新古今調が表われていると共に、茂吉、白秋が少いのは、彼等が万葉調である事を意味している。

6　終助詞「かも」について

「文語文法詳説」で「上代に行なわれた」とあり、「国文学」（「解釈と教材の研究」七月号臨時増刊）には、「疑問の『か』に詠嘆の『も』が添つたもの、万葉調と言えば『けるかも』と言われる程万葉集で愛用された。起源的には『か』＋『も』であるが、当時これが『か・も』と分けて意識されていたか、『かも』と一語であつたかは明らかでない。……、しかし、さかんに用いられている中に、万葉時代にすでに疑いと詠嘆とが区別されずに『かも』は一語として熟してしまつたと考える方が自然であろう。

…、さてこの様に万葉期に華やかな存在であつた『かも』は万葉集から約百年の後の古今集では殆んど、『かな』にその位置を譲り……。」とある。以上の事をもとに、表と比べてみると、晶子が「0」、白秋が「35」、茂吉が「46」となつていて、茂吉が「46」で一番多い、これも彼が万葉調歌人であるという、動かさざる裏づけである。又白秋が「35」で多いのは彼が、万葉、新古今を愛しながら、それにかたよらぬと言つてはいるが、やはり、それが、自然に表われて来るのである。それに、彼の作風が、最初大変万葉調であつた事や、彼が、茂吉と影響しあつた仲であつた事などを考える時、茂吉と同じように、万葉的傾向を、助詞の上にも表して来るのである。又「白秋研究」の中で木俣修氏は「桐の花」鑑賞の所で「……結句の『かな』のごときも不用意には使われていないのであつて、万葉的沈痛を与える『かも』の語韻を避けて、浪漫調を形成するに相応しい『かな』を置いたのであると見てよいであろう。」と言い、又「かな――感動を表す終助詞。『かも』は、万葉集に多く用いられたもので、万葉主義者は、今もこの語を多く使う。『かな』は、古今以後に専ら用いられたものだが、白秋には、この『かな』の使用が多い。」とある。故に、ここにも「かも」が万葉調の歌人に多い事が言われている点、茂吉は、全くそれに適するのであるが、白秋の場合、ここに言つている様に「かな」は、私の表における限り多いとはいえない。むしろ茂吉の方が、使用率が多いのである。故に、白秋が「雀の卵」以後どう変つたかは、この表では判明できぬが、木俣氏の取りあげた「桐の花」においては「かも」の方が多いのである。故に、この木俣修氏の意見には、共鳴しがたい。

結　論

本論において、助詞のいくつかを、ひろいあげ、それをみてきたが、それに対し次の事が言えると思う。

晶子が、一般に、新古今調の歌人といわれる如く、助詞の上においても、平安期あるいは、平安以後の助詞を多く使つて、万葉期の助詞を少ししか使つていない。この事から、平安期的歌人と同時に、新古今調の歌人であると言う事は、疑えぬ事である。

これに反し、茂吉においては、万葉調の歌人と言われる様に、上代における助詞をより多く使用し、平安以後の助詞をあまり使わない事は、助詞の上からも、万葉調の歌人といえるのである。

しかし、白秋において、彼自身は、新古今、万葉を愛しても、それに溺れないと言つてはいるが、やはり助詞の面においては、影響されていて、とくに、私の統計から見ると、茂吉と同じく、万葉の影響を強くうけているといわねばならぬのである。やはり彼の作品が最切万葉的であつこ

事や、茂吉と影響しあつた仲である事などと考えあわすと、「雀の卵」の始めまでは、万葉調であつたといえるのである。

以上が三人における統計表から得られた結果である。

「みだれ髪」の浪漫性

山本　かつ恵

鳳晶子の名で出版された才一歌集「みだれ髪」は、その大部分が当時の「明星」に載つたもので、明治三十三年五月から三十四年八月（作者の満二十一才から二十二才）までの作品である。

その浪漫的開花は、「若菜集」から「落梅集」に至る藤村の自己抑制、内攻、つゝましさ、純情などの情緒による人間的制約からの脱却によつてもたらされ、古風な人妻ぶりの世界を浪漫的な美的対象として助けようとする頽唐的嗜好さえ色濃くおびていたのである。そして「みだれ髪」は「明星」歌風を代表する傑作となつた。若干の欠点はあるにせよ溢れる青春の情思をあるいは現実の世界に、あるいは空想の世界に、あるいは古典の世界に托して歌い、更には世俗に対する烈しい反逆精神が横溢し、在来の和歌というきれいごとの観念を一掃せしめた感がある。そこには青春の多感多情が大胆に、強烈な主観が牽直端的に歌われている。そして、その浪漫的調子の高さが、明治の歌壇において他の追随を許さなかつた特色でもある。しかし、すべての感動を取捨てる所なしに歌おうとした結果は、一首の歌に余り多くの感情を盛ることとなり、晶子自身「後日に読むと作つた私自身にも解らないものさへある。」と告白している程、混乱と晦渋に陥つた一面のあることも事実である。

私にとつて「みだれ髪」の全短歌は得がたい深淵である。短歌の手法とするイメージの造型は全く個人的な深層でなされ、誰もそこを覗けないのだから、他人の作品を理解しようとする所にある無理が生じるのかもしれない。だが訴えようとする言葉の中にまばゆい美を感知し、魅きつけられるものを直感できたなら難解だろうとモダニズムだろうと、それで充分存在価値があり、歌われた事実に何らかの異和感を覚えたにしても、その内部に何かを考えさせ、その人を感じさせる意味を持つているならば、短歌として大切な使命を果たしているのではなかろうか。そういう意味でこの小論では晶子の一端を知る為に、その代表歌集「みだれ髪」によることとし、内容ごとに六章に分かち、その浪漫性を考えてみることにした。